異文化と心通わせ

つくば通信 ㉔

村田　佳子

再会を楽しんでください～良いお年を～

先日帰国した西アフリカの女性たちは冬に咲く花のようでした。家族との再会を楽しみにしていました

「今日、うれしいことがあったんですよ。昔、仕事で一緒だった方、ちょうどどうしてるかなあと思っていたら、今週つくばで会えたんです。ささやかなクリスマスプレゼントになりました」という上司の一言。師走、ともすれば「ごぶさたしています」の一言で済ましてしまいがちな再会を「いいことがあった」と心にとめて喜べる気持ちの余裕、感性、すてきだなあと思いました。

私も先日「いづ（いつ）帰ってくんな（くるの）？」というメールをもらいました。3年前に再会して以来、連絡を取り合っている小学校時代の同級生からでした。彼女からのメールはいつも庄内弁。標準語にはうまく訳せないニュアンスを含んだ表現もあって懐かしく、心が和みます。

彼女からのメールを読んだ後、頭の中が庄内弁になっている状態で朝、お医者さまと患者さんの会話を通訳していたときのこと。ポンポンと交わされる比較的スピーディーな会話の中で患者が放った「Yes」という言葉、「はい」と訳すところを思わず「んだ」と出てしまいました。一瞬、「ん？」と皆顔を見合わせ流れが止まってしまったのですが、看護師さんもお医者さまもそして私も笑い、場が和みました。反射的に方言が出る自分をやっぱり庄内の人だと実感しました。帰省したら庄内弁で思いっきりおしゃべりを楽しみたいものです。

今年は職場でも再会の場面が多い年でした。ガーナでの農業プロジェクトを終えた先生、労働経済の調査のためにルーマニアに行っていた友達、イラクの復興支援のために活躍している元同僚などが帰国後、元気な顔を見せてくれました。また、元の上司は勤務先の東ティモールの治安が悪化したため強制退去を命じられ、弾丸が飛び交う中、荷物をまとめる間もなく帰国。無事に「ただいま」を聞けて安心しました。

そのほかにも昨年11カ月の研修で来日していたカリブ海のアンティグア・バーブーダの男性が内緒で再来日しました。その前週、出張先のニューヨークから電話をもらい、元気な声を聞いていたのですが、まさか職場の玄関に現れるとは思ってもいませんでした。大阪に用事があっての来日でした。びっくりさせようと誰にも言わずそれもほんの数時間、立ち寄ってくれたのです。

間もなく帰省の時期です。進学や就職などで「庄内」という文化圏？から異なる土地に巣立って行ったお子さんやご兄弟、お友達が帰省する時期でしょう。今でこそ庄内空港に1日4便の飛行機が行き来していますが、学生時代、年末ぎりぎりまで帰ることができず、そうこうしているうちに熱まで出してしまい、ローカル線と乗車率200％の新幹線、特急いなほと乗り継いで帰ったことがあります。鶴岡駅の凍ったホームを歩きながら、モコモコに着込んで満面の笑みで手を振る母を改札口に見たときにはホッとして涙が出そうになりました。この冬もそんな風に帰省するお子さんを迎えるご家族がたくさんいらっしゃると思います。どうかよいお年を、そして再会を楽しんでください。

今年は思いがけない荘内日報さんのお声がけで、数回の連載予定が24回を数えることとなりました。週に一度、公に文章を書くという宿題は、素人の私には今年一番の挑戦でした。おかげで普段見過ごしてしまいがちなささいな出来事も、書いてみようと心に受け止めることができ、勉強になりました。また読んでくださった方々からの手紙、メール、お電話は励みになりました。新聞とはニュースを知るばかりでなく、人と人をつないでくれるものなのだとあらためて思いました。来年は1月8日からということで新年、心が温まるようなことを少し書ければと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

（鶴岡市出身、JICA筑波国際センター・クリニックコーディネーター）